

夢を喰らう写真家集団

——夜韻の会と写真展

石井 仁志

(20世紀メディア評論 写真、映像、音楽)

絶句という言葉があるが、実際に体験することはそう多くはあるまい。2008年、正月気分がまだ抜けきらない内だった。一本の電話を受けて、わたくしは、そこに立ち尽くし震え絶句した。見る見るうちに潤む目から八方に涙が飛び散った。後は良く覚えていない。電話の相手は清里フォトアートミュージアムの広報担当、小川直美さんであった。重い事実だけが頭の芯の部分でうごめくように感じ、生理的に脱け般的自分をしばらくはもてあました。写真家、内野雅文の死はこうして、わたくしの知るところとなった。享年34歳、京都の八坂神社撮影中に心筋梗塞を起こして倒れた。08年元日が命日である。彼は京都に居を移し作品を創りつつ東京に戻ると訪ねてきて、多量の焼き付けたばかりの白黒印画紙を目の前に撒き散らし、作品談義、写真談義にあけくれた。「石井さん、石井さんのサロンできたら展示の最初はこれですよ。」それがいつもの決まり文句……。

夜韻の会という名前こそ未知ではあったが、内野雅文との会話の中で写真家集団を作るという構想も、幾度か話し合った記憶がある。いわば現在、この写真家集団「夜韻の会」が存在するのは、わたくしと彼との合作といっても過言ではないかもしれない。そして彼は、現在も夜韻の会の特別会員である。この会は2010年にわたくしが会員各氏に呼びかける形で始まった。わたくしの人選であるが、入退会は自由。ゆるい縛りだが写真作家としてのゆるぎない視座の形成に役かえる様な活動を模索し、それぞれのステイタスの向上を目指して、創作活動の一助となるような企画を実践してゆくことが大事だと思っている。これが会員同士の良い目標にもなり、真剣な写真談義や作品講評の場ができたかと考えてきた。年齢的にも幅があり、さまざまな経験、思考、そして作品が集まることでそれぞれの現時点に厚みが加われば申し分がないと思う。実際にはなかなか難しいのだが…。

作家個人の生活があり、そこにグループの活動が重なるのだから、おのずと会員の会への係わり方も一様というわけにはいかない。夜韻の会というネーミングは、写真家としての真の自立を掲げて静夜に思考を語らい、余韻のように響きあう会といったイメージを表している。2010年11月に第一回、翌11年2月には第二回のグループ展を、TOTEM POLE PHOTO GALLERY (東京)で開催した。両展覧会ともに「Spicilegium Amicitiae」という舌を噛みそうなラテン語の展覧会名がついている。「スピシレギウム アミシティアエ」と読むが、この意味は「友情の麦穂の束」といったところか。古い記憶というのは、時として鮮明に浮かび上がる。青春時代の座右の書ともいえるべき、『渡辺一夫著作集』の月報にこの題名が、渡辺自身の筆で刻まれていたのを初回グループ展を企画した当初、すっきりと思い出したのである。これでいこうと思いついた。渡辺一夫は、わが国で真に尊敬に値する仏文学者だが、自らは決して学者と呼ばれるのを良しとせず、一書生として生涯フランス文学を研究した。エラスムス、ラプレーといった当時翻訳不能とも思われた文学を紹介した人、その名訳と研究をわかるわからないも棚上げにして、むさぼり読んだ記憶も同時に思い出していた。

写真の見方を考える時、先に書いた読書同様、わたくしは自分の中にある作品に対する評価や好き嫌いまでも置き去りにして、ひたすら数を見続けたことがある。写真集から新聞や雑誌、週刊誌、ありとあらゆる人々の個人的記録写真、果ては古写真や写真絵葉書まで、写真ということだけを意識して…するとある時期、見続けた写真が夢に出た。同時に写真の多様性という現実が、理屈ではなく体内に吸収されたように感じたことがある。鑑賞力というと格好が良いが、眼力の問題である。数を撮るといことが如何に作家にとって重要であるかと同様に、写真好きならば、どれだけ写

真を見ているかもまた重要な要素であるように思う。そして本物の写真作家は写真を見ることにまた超一流の眼を持っているということを、わたくしは良く承知している。

写真作家や写真愛好家の個展やグループ展をはじめ、さまざまな写真展覧会を見るにつけ強く思うことは、写真展示の画一性である。作品の大きさのバラツキなどは別として白い壁面（モノトーンが大半だ。）に目線の高さで横一列、いかに写真が面白くろうが、スーッと見回して数分で客が帰ってしまうのをよく観察する。壁のここに余白があったらな。とかここは写真の順番を変えるべきだろうと思うことが多々ある。もっと根本的にこの展覧会の構成ならば作品数は半分でもいいなと思うこともあった。展示点数は重要な問題なのだ。ストーリー性重視のドキュメンタリーでは、写真をどう組み合わせる強い主張を表すか、写真を絞りつつ熟慮する。また群として見せる場合など、コントラストや構図に配慮しながら、あえて壁面を埋めるような大胆な構成も考慮する必要がある。要するに鑑賞者にも考えさせるような展示、それは時として見にくいという効果を伴うことすらあるかもしれない。よく会場でこの展覧会のコンセプトはと作家が語っているのを聞くことがあるが、概要も大事だが、それを見せる会場構成にはもっと配慮が必要だと思う。

さて、この文章を書いている時点（ほぼ1ヵ月前）で、「Spicilegium Amicitiae III — 私たちは、写真で、未来に、何を残せるのか？」の作品選定は終わっている。夜顔の会の会員とは電話やメール、時には直接会って打ち合わせ、新潟大学地域映像アーカイブの中俣正義作品もかなりの時間をかけて選定した。昨年、細江英公人間写真展「気骨」をやらせていただいた砂丘館という大好きな場所で、再び写真展の企画から会場構成までを担当できることは大きな喜びであり、また緊張もしている。なにしろ夜顔の会のグループ展示としては、ここ砂丘館の蔵のギャラリーは願ってもない発表の場であるし、そのうえ新潟大学の地域映像アーカイブ、砂丘館の御協力で新潟を代表する写真映像作家の一人である中俣正義、高橋捨松撮影の古写真、牛腸茂

雄の魅力ある写真と夢のコラボレーションが実現するからだ。展示構成のエスキスもほぼイメージが固まってきた。しかしこればかりは、搬入の日、壁面とにらめっこしながら思考を繰り返し、手直ししていく必要がある。場合によっては選定作品の数も抑えて展示することもありうる。

夜顔の会の写真展覧会を企画構成するうえで最も難しいのは写真作家の主体性とわたくしのイメージをどう折り合いを付けて、最も展示効果のある面白い展覧会に導いてゆくかという問題だろう。作家としては常に最新作を発表したいだろう。近作から最良のものを選びたい気持ちはよく理解できるのだが、同時に重要なのは整理である。作家として歩む道程の中で、案外意識されていないのが自分の代表作だ。逆に良い写真家であればあるほど、作品数は飛躍的に増えてゆくはずだから、自己管理しながら意識下にこの一枚、このシリーズの中の幾枚か、というように常に過去作を高い次元で整理し目標としておくことが重要だと思う。このようにして選別された代表作で壁面が飾れるとするならば、グループ展としての質は飛躍的に向上するし、黙っていても個々の作家の作品が写真の多様性を語り、鑑賞者に写真の面白さをストレートに伝えることが可能であろう。展覧会概要が自然と浮かび上がってくるように思う。もちろん同じ土俵で近作、新作の競合展示も面白いだろうし、可能性は無限に広がるに違いない。

「Spicilegium Amicitiae III — 私たちは、写真で、未来に、何を残せるのか？」この展覧会の隠されたキーワードは「夢」である。わたくしたちは、今年の3月11日、「夢であってほしい！」と声を絞り出すしかないような災害、人災に見舞われた。復興を唱えながら、そのじつ、つまらぬ政党間の駆け引きを繰り返す政治。不便を承知してでも、この国に原発は要らないという声を聴こうともしない推進派の科学者、経済人や官僚や電力会社。例え夢のような理想であってもそれを目標として捉え、一步一步近づく努力をすぐ始めるべきだ。解決の難しい問題こそ少しでも理想的な方向へ、人間の創造力をフルに活用してベクトルの矢

を向けなければならないと思う。砂丘館の玄関に、わたくしはあえて、ふるさとを飾る。それは厳しい現実と無限の夢だ。過去、新潟にも大きな震災があった。これを冷静にドキュメンタリーとして長いスパンで表現した写真を見てもらおう。親族を捉えた古写真から新潟はどう変化してきたのかをつぶさに観察していただきたい。そして、蔵のギャラリーに足を踏み入れ、夜韻の会会員による世界の都市、地方、現代の新潟、伝統、そして思想、人間、生命を感じていただきたい。

夢を喰らう写真家集団があったっていいじゃないか。写真作家の身の周りは決して恵まれた環境ではない。デジタル写真の可能性が逆に写真作家の首を絞めている側面がある。しかし従来からの写真の価値観の変化は、3.11以降飛躍的にその意義を高めたのではないか。個人の記録が、実はその周囲をも含めて地域の記憶でもあり得る。さらには地域の記録の集積がアーカイブスとして整備され、デジタル化され一般に可視化されていくとすれば、ここに歴史の正史、すなわち権力者側からの目線以外の傍系史が生まれ、従来の歴史はおのずと変更を余儀なくされるかもしれない。このような時期だからこそ、夜韻の会は現代を見据え続けるのだ。それぞれの視座で。夢を喰らう写真家集団、夜韻の会。この写真作家達の作品はまさしく買いだ。

(夜韻の会マイスター)



〈040-040-16〉
昭和石油タンクの残骸
(撮影：中俣 正義)